

私の元気のもと、それは家族

村山 輝子

JR 東京総合病院婦長

自立した将来を夢みて

看護婦になろうと思ったのは、小学校高学年の頃でした。白衣姿に憧れたことと、田舎に生まれ育った私の周りで女性が自立できる職業といえば、教師か看護婦だったからです。仕事の中身がよくわからないまま、看護学校に入学してみてもうっかりしたことがありました。それは、初めての実習の時のことでした。中年の男性の患者さんに「どうして看護婦などという地味な仕事を選んだの？ あなたならもっときれいな職業を選べただろうに」と言われたのです。この時はじめて、世間の看護婦に対する評価がわかりショックでした。しかし、「今にきっと看護婦の仕事の重大さがわかる時が来るはず」と気をとり直したことを、今でもよく覚えています。

看護婦人気が高まっている現在、看護婦という職業がようやく世の中に認められたことを肌で感じて嬉しく思います。

結婚と出産——育児は育自

看護学校時代、結婚はまだまだ先のことと本人だけではなく同級生たちにもそう思われていました。ところが、その私が、トップで結婚してしまったのです。それは看護学校を卒業した翌年の1月のことでした。

結婚を急いだ理由は、彼が卒業後の赴任先が岡山に決まったからでした。今は遠距離恋愛が流行になっていますが、その時は考えも及びませんでした。当時、若い女性向けの雑誌が倉敷を紹介す

ることが多く、私はとてもおしゃれな街というイメージを受け、「倉敷なら行きたい、住んでみたい」という思いが湧きあがり、二つ返事で結婚を承諾してしまいました。

私自身も転勤することができ、共働きの新婚生活になりました。その地で私は、2人の息子たちを出産し、幼児期まで育てることになったのです。

初めての出産は、陣痛の痛みより、努責感を逃すことのほうがつらかった思いが強く残っています。とにかく、担当の助産婦が「いきんでもいいですよ」というまでは、ひたすら呼吸法で耐えました。その後、分娩台に運ばれた時の喜びは何物にも例えようのないものでした。つらいと思っていたはずなのに、無事に分娩を終えた瞬間思ったことは、「次に産む時には……」でしたから笑ってしまいます。

当時は育児休業制がまだ敷かれておらず、産休を終えた後はすぐに仕事に出なければなりませんでした。そこで保育園に入れるまでは、近くの託児所に預けることになりました。夫は出産前から子供の名前を決めるほど誕生を待ち望んでいましたし、生まれてからも、沐浴やオムツ交換など積極的に育児をやってくれました。それだけに、まだ小さな長男なるべく自宅で育てたいと思ったのでしょう。夫は、休日や夜勤の前後の時間をすべて長男の保育に充ててくれました。ですから、朝私に連れられて託児所に預けられた長男は、その1、2時間後にはお父さんに抱かれて自宅に戻っていました。私たちは子育てが楽しくてしかた



下、

がありませんでした。その2年後には次男が生まれました。

親も親戚もいない土地での妊娠・出産でしたが、不安は全くありませんでした。なぜなら家庭は2人で築くものという意識がお互いにあり、私も夫以外の人を頼るなどとは考えてもみませんでした。そんな私たちも、子供は良い環境で育てたいという思いは強くあり、妊娠する前から地域の保育園を訪ねたり、近くに新しい保育園ができるという情報を得れば、園長になる予定の方に電話で尋ねたりと、今思い出すと笑い話ですが当時は真剣に保育園探しをしました。その時の園長先生には、その後、言葉では言い尽くせないほどお世話になり、今でもお付き合いいただいております。

乳児を預けて女性が働くことにまだまだ理解がある世の中ではなく、私自身も仕事を続ける意味があるのかと悩むこともありましたが、世間知らずの若い母親が子供に与えることができる物事には限度があり、保育園の力を借りて育てることを選びました。そうはいっても、子供が病気の時などは退職を考えたこともありましたが、そんな私を支えてくれたのは夫は勿論ですが、職場の仲間でした。そして、緊急時の保育ママとしてご近所の方々にもずいぶん助けていただきました。

よく「男の子2人は大変ね」といわれましたが、男の子を兄弟で育てることは想像以上に楽しいことが多く、現在に至っています。様々なことがありましたが、私が仕事を続けられたために、多くの方々と出会うことができました。そして、わが

家の子供たちと私たち夫婦はたくさんの人々の愛情を受けることができたと思っています。

東京に戻って、今……

12年前に、ひょんなことから岡山から東京に戻ってきました。そして縁があって、私は助産婦学校に進学しました。長男が小6、次男が小4の時でした。卒業式には次男が出席し、緊張した面もちで卒業アルバムに収まっています。それまでも、夫や子供たちに助けられることは多くありましたが、助産婦学校時代は、今まで以上に苦勞をかけました。なにしろ受け持ちの妊婦さんの状態によっては家に帰れないこともあり、3人が支えてくれたおかげで卒業することができました。後になって、仕事上の悩みで「お仕事やめようかな」と言ったとき、「僕たちがあんなに協力してせっかく助産婦になったのに、こんなに早くやめたらだめだよ！」と子どもにたしなめられたことがありました。甘んじている自分を恥ずかしく思いました。

仕事に注ぐ時間が多くなってきた今、改めて家族の存在をありがたく感じます。どんなに疲れていても、子供たちの元気な顔を見ることがなにより薬です。私は家族であっても、お互いを尊重し良い関係を作るために努力をする必要があると思ひ、日々様々な工夫をしているつもりですが、これからも現状に甘んじることなくお互いを大切に思える家族関係を築いていきたいと思ひます。

次は、ジャズピアニストを目指してがんばっている助産婦、鈴木知代さんにバトンタッチします。